

第1章 序論

1-1 本研究の背景

現在、価値観の多様化やライフ・スタイルの個性化をはじめとする近年の社会の構造変化等に対応して、国民の観光ニーズは多様化・個性化が進んでおり、自然志向、健康志向、ふれあい志向、ほんもの志向などが注目され、関心を集めている。

また、近年の自然環境の保全・保護に関する関心の高まりなどから、少人数で自然や野生生物とのふれあい等を通じて自然保護に対する理解・認識を深めていく「エコツーリズム」の関心が高まっている。さらに、近年の自然志向への高まりを背景に、旅行業者と各地域の観光協会、農林漁業者や農協等との連携により、農山漁村地域を中心に自然、文化、人々との交流等を目的とした滞在型の余暇活動である「グリーン・ツーリズム」への関心も高まっている。このような傾向は、文化遺産の見学が中核となっていた修学旅行においても表れてきており、農業体験や自然体験等による体験学習の比重が高まってきている。つまり、観光にとって「環境」や「体験」ということがキーワードになってきているのである。

このことは、観光と密接な関係のある宿泊施設にとっても例外ではない。実際に様々な面で環境に配慮した取り組みを行う宿泊施設やそれを認定する団体や制度は増加している。例えば、ECOTELやISO14001のような環境認証を取得し、環境配慮を行う施設や、自主的に環境配慮の取り組みを行う施設が増加している。また、環境に配慮した宿泊施設を評価し、そのような宿泊施設を積極的に利用していこうという取り組みも行われている。さらに、研究においても、環境と宿泊施設をテーマにした研究が取り組まれるようになってきている。

しかし、現在の環境配慮の取り組みは、主に環境のハード面に関する取り組みであることが多く、ソフト面での取り組みはあまり取り組まれていない。つまり、「宿泊施設の環境配慮＝ハード面での取り組み」という図式が強いのが現状である。しかしながら、環境配慮の取り組みの中でもソフト面の取り組みは、ゲストの環境意識に刺激を与える事や、エコロジカルなライフ・スタイルへの転換の足掛かりとなり、重要であると考えられる。つまり、今後の宿泊施設における環境配慮はハード面の取り組みだけでなく、ソフト面の取り組みも必要であり、重要なのである。

1-2 本研究の目的

本研究では、ハード面、ソフト面の両面における環境配慮の取り組みを行っている環境共生型ペンションを対象とする。そして、現在のような環境共生型のスタイルになった経緯、成功とされる要因、現在まで継続している理由について、オーナーの思想、その思想をゲストに伝える事、また宿泊しに来るゲストに注目して調査・考察を行う。最終的には、環境共生型ペンションやエコセンターへの知見を見出す事を目的とする。

1-3 論文の構成

本研究は、環境共生型ペンションの経緯、成功とされる要因、現在まで継続している理由について、オーナーの思想、その思想をゲストに伝える事、また宿泊しに来るゲストに注目して調査・考察を行い、環境共生型ペンションやエコセンターへの知見を見出すものである。本論文は、結論を含めて6章から構成されている。図1-1に本論文の全体構成と各章の相互関係を示す。各章の内容は次の通りである。

第2章は、観光と宿泊施設について論じている。観光に関しては、観光心理学の側面から考察を進めている。また、宿泊施設に関しては、宿泊施設における環境配慮の取り組みの現状や特徴を「宿泊施設における環境配慮の4領域」から論じている。

第3章は本研究の目的や調査方法、分析方法、研究対象である『舎廬夢ヒュッテ』についての概要を説明している。

第4章、舎廬夢について、舎廬夢の歴史、システム、プログラムの3点から調査した結果を考察し、舎廬夢の特徴を抽出している。

第5章は、舎廬夢に来るゲストに注目し、ゲスト全体、ビギナー、リピーターの3つの視点から調査、舎廬夢のゲストの特徴を舎廬夢との関係から考察している。

第6章は、4章、5章で得られた結果を基に、環境共生型ペンションの要素を抜き出した。また、エコセンターと舎廬夢の要素が類似している事から、舎廬夢型エコセンターという新しい形態のエコセンターのモデルを考察、提案している。

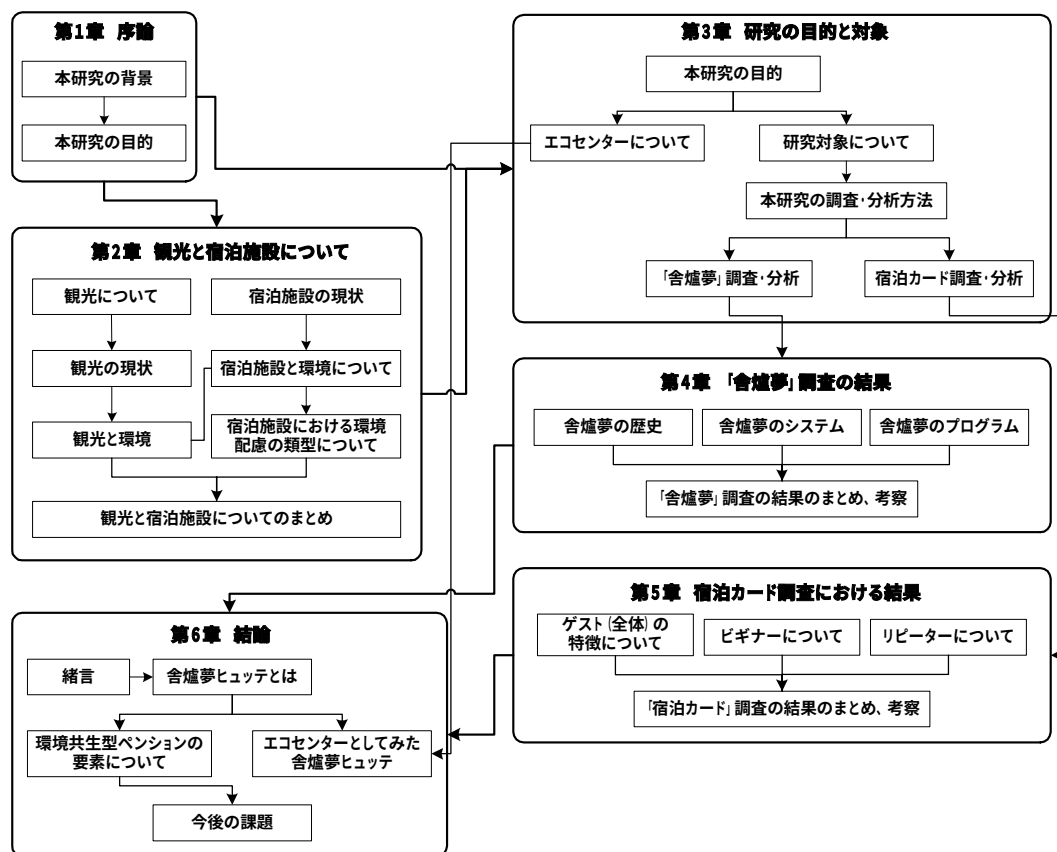


図1-1 論文の全体構成